ひと百景

手話を交えながら茶摘みに汗を流す。京都府京田辺市にある「さんさん山城」

さんさん山城 施設長
（京都・京田辺市）

新免 修さん

1975年生まれ。京都市出身。39歳で「さんさん山城」の施設長に就任。現在は政府の「農福連携等推進会議」有識者の一人。

〝農福連携〟で地域の力に

の畑で育てるのは、高級宇治抹茶のもととなるてん茶はじめ、サトイモの一種・エビイモ、田辺ナスなど地域の特産品ばかり。30人以上の聴覚障がい者らと共に加工、販売まで手掛ける。障がい者が農業分野で活躍する〝農福連携〟に欠かせない存在だ。

耳の聞こえない両親の元に生まれ育った。家庭でのコミュニケーションは手話で行い、家の外の世界では音声で会話していたという。30歳を過ぎたころ、民間企業からの転職がきっかけで、仕事として〝福祉の道〟を歩み始めた。

聴覚障がい者といっても取り巻く状況は千差万別。社会的孤立、認知症、虐待――。現場で手話通訳士、また生活相談員として、ろう者と向き合う中で、「言葉（手話）の裏側にある、その人の背景や家族の苦労も思わず見ていた」と話す。

新たな赴任先で施設長になってからは、既に始動していた就労支援も一から学ぶことに。より地域に開かれた事業所をめざし、3年前に「コミュニティカフェ」を開設。毎日多くの地元市民でにぎわう。ランチの来客数は延べ2万人を超えた。

「関係機関の連携支援のありようで障がい者も社会の一員として十分活躍できる」と話す新免さんは、政府の「農福連携等推進会議」有識者の一人。「農福連携を学問分野の一つに発展させていきたい」。農福連携への探究心は尽きない。